冒襄における杜詩

大木　康

はじめに

明末清初の文人冒襄（一六一一～一六九三、揚州府如皋県の人）に関わる文学作品を見ていると、冒襄自身の作品中での直接的言及であったり、唱和詩であったり、あるいは冒襄について記した他人の文章に見えたりと、あらわれ方はさまざまながら、しばしば盛唐の詩人杜甫の名を見いだすことができる。冒襄は全唐詩集の編纂を企てていたともいい（『影梅庵憶語』）、唐詩をはじめとする前代の他の詩人への言及が見られないわけではないが、杜甫に対する関心の深さはたしかに突出している。(1)

冒襄は杜甫の詩に何を見いだし、杜甫を語ることにどのような思いを込めようとしていたのであろうか。本稿で考えてみたいのは、明末清初の一文人にとって杜甫が持っていた意味の一端についてである。

一、冒襄の周囲にあった女性たちと杜甫

冒襄といえば、もと南京秦淮、蘇州半塘の妓女であり、後にその側室となった董小宛が若くして亡くなった際に、その思い出を書き記した『影梅庵憶語』が広く知られる。[2]『影梅庵憶語』の「紀詩史書画」の章には、冒襄が全唐詩集の編纂を進めていた時、董小宛がその作業を助けた思い出が記されている。そこに、次のような一段がある。

かくして一帙の書物を手に入れるたびに、かならず細かく朱筆を加えた。他の書物でこの集に言及するものがあれば、みな書物の冒頭に書き記しておき、彼女にわたして保存させたのである。詩人の編年については、『(新)唐書』を基準にした。彼女は一日中わたしを助けて調べものをしたり書き写したりし、注意深く校訂し、昼も夜も向かい合って仕事に精を出し、彼女はいちいち指示しなくても仕事がわかっていた。彼女は詩を読めばすっかり理解し、また気の利いた解釈を出したものだった。特に『楚辞』、杜甫、李商隠、そして王建・花蕊夫人・王珪の『三家宮詞』を好んで熟読した。身の丈ほどの書物を机のまわりにつみあげ、真夜中のベッドでもなお数十家の唐詩集をかかえて横になった。いまこの部屋も封印されほこりだらけになって、わたしは開けるに忍びない。これから先、全唐詩集編纂の事業は誰といっしょに完成させたらよいのだろうか。ため息をつくばかりである。[3]

この記述では、董小宛が詩を好み、しっかりした読解力を持っていたことを記し、彼女が好きだった詩人、作品と

して、『楚辞』、杜甫、李商隠、王建・花蕊夫人・王珪の『三家宮詞』が挙げられている。ここにたしかに杜甫の名が見える。[4]

董小宛が亡くなった後、冒襄は、年若い呉扣扣を側室にしようとする。ところが、扣扣も、正式に側室になろうとする直前に病を得て早世してしまう。冒襄の語る彼女の思い出を、聞き書きの形で陳維崧が記した「呉姫扣扣小伝」（『陳迦陵文集』巻五）にも、冒襄、呉扣扣と杜詩に関する記述がある。

> 彼女に詩詞を教えると、すぐに覚えて朗唱した。時折、屏風のかたわらから、鶯の雛のような声が聞こえてきた。彼女はとりわけ『文選』と杜詩を読むのが好きで、かつて杜甫の「北征」の古詩を教えた時には、たった三回読んだだけで、本を閉じて暗誦し、朗々と一字も抜け落ちることがなかった。[5]

杜甫の「北征」は、至徳二年（七五七）、安史の乱のさなか、粛宗の行在所である鳳翔から、家族の疎開する鄜州に帰った杜甫が目にした、戦乱によって荒廃した道すがらの光景、家族との再会、そして唐朝再興の祈念を詠じた、五言百四十句からなる長編の古詩である。全体で七百文字からなる杜甫の「北征」の詩を、二三回読んだだけで、一字一句まちがえずに暗誦できたのはたしかに才能である。それにしても、冒襄がわざわざ扣扣に杜甫の「北征」の詩を選んで教えていたのは、おそらく『影梅庵憶語』でも語られる明末清初の王朝交替に関わる戦乱の凄惨さ（後述）が、杜甫の「北征」と重なるところがあったからではないだろうか。例えば、

夜深経戦場　夜深くして戦場を経れば
寒月照白骨　寒月　白骨を照らす
潼関百万師　潼関　百万の師
往者散何卒　往者（さき）には散ずること何ぞ卒（にわ）かなる
遂令半秦民　遂に半秦の民をして
残害為異物　残害せられて異物と為（な）らしむ

夜戦場を通り過ぎれば、寒々とした月の光が白骨を照らしている。潼関を守っていた唐の百万の軍隊が、あっという間にちりぢりになってしまい、秦の地の半分の人びとが殺されて人でないものになってしまった、といったところは、清初、清軍の南下を避けて江南の各地を逃げまどっていた時、冒襄がみずから体験した様でもあったろう。もっとも「北征」には、ようやく鄜州の家族のもとにたどり着いた杜甫が、都から持ってきたおみやげである化粧品を取り出して与える場面がある。

瘦妻面復光　瘦妻の面は復（ま）た光（かがや）き
痴女頭自櫛　痴女は頭を自ら櫛（くしけず）る
学母無不為　母を学んで為さざる無く
暁粧随手抹　暁粧　手に随ひて抹（まつ）す

移時施朱鉛　時を移して朱鉛（しゅえん）を施せば
狼藉画眉闊　狼藉　眉を画くこと闊（ひろ）し

痩せた妻の顔は輝きをとりもどし、娘も髪をくしけずる。娘は母親の朝の化粧のまねをして、べにやおしろいをぬりたくり、幅広いめちゃくちゃな眉ができあがってしまった。こんなあどけない娘の様子を描いた部分もあり、それがあどけない扣扣と結びついていたのかもしれないが。[6]

董小宛が杜甫を好んだといい、呉扣扣は杜甫の「北征」詩を暗誦した。それもみな、みずから全唐詩集編纂の志を持ち、杜甫に特別の関心を寄せていた冒襄の影響下にあったからにほかなるまい。

二、冒襄の詩における杜甫

冒襄の詩作品における杜甫について、ここでは（1）冒襄が単独で作った詩と、（2）友人たちと唱和して作った詩との二種類に分けて考えてみたい。

（1）冒襄が単独で作った詩

はじめに『樸巣詩選』に収められる「感懐七歌　倣杜少陵体」を見たい。詩題に杜少陵の体に倣うとあるが、この

詩のもとになっているのは、杜甫の「乾元中寓居同谷県、作歌　七首」（『杜詩詳注』巻八）である。杜甫の第一首。

有客有客字子美　客有り　客有り　字は子美
白頭乱髪垂過耳　白頭の乱髪　垂れて耳を過ぐ
歳拾橡栗随狙公　歳　橡栗を拾ひて狙公に随ふ
天寒日暮山谷裏　天は寒く日は暮る　山谷の裏
中原無書帰不得　中原　書無くして帰ること得ず
手脚凍皴皮肉死　手脚は凍皴し　皮肉は死す
嗚呼一歌兮歌已哀　嗚呼　一歌す　歌は已に哀し
悲風為我従天来　悲風　我が為に天従り来る

子美という字の旅人がある（杜甫の字は子美）。乱れた白髪は、垂れて耳を覆っている。毎年、寒く日も暮れようとする時、谷間のまちで、猿回しの後について、どんぐりを拾っている。中原からの手紙はなく、帰りたくても帰れない。手足はこごえてあかぎれ、皮も肉も感覚がない。第一番目の歌はすでに悲しい。悲しげな風が天から吹き下りてくる。そして、この詩に倣った冒襄の第一首。

有客有客採蘭芷　客有り　客有り　蘭芷を採る

搴芳潔岸称男子	芳を潔岸に搴(と)りて男子と称す
峙山渟海当中立	峙(そばだ)つ山渟(ふか)き海　中に当りて立つ
進退取舎準廉恥	進退取舎　廉恥に準ず
十年遺落埋故紙	十年　遺落して　故紙に埋む
英雄之志徒爾爾	英雄の志　徒らに爾爾(じじ)たり
嗚呼一歌兮歌未充	嗚呼　一歌す　歌未だ充たず
寸心揺曳如飛蓬	寸心　揺曳して飛蓬の如し

ここに旅人があり、蘭や芷の香草を採っている。清らかな水辺で芳しい草を採って、すぐれた男子と称している。高い山、深い海のまん中に立ち、出処進退については、清廉で恥を知ることを基準に行ってきた。世を捨てて十年、古書に没頭している。英雄の志があっても何にもならぬ。ああ、ここに第一歌を歌うが、まだ歌い足りない。心は風に舞い飛ぶ蓬のように揺れ動く。

「有客有客」ではじまり「嗚呼一歌兮歌〇〇」で結ばれる形であり、七首の組み歌である点で、まず詩の形式の上で、杜甫の詩をそのまま踏まえている。また、内容の点からも、同谷にあって杜甫が苦労したさまを詠じたものであり、冒襄の詩はその点でも共通する。

十年世を捨てて古書に没頭しているとは、冒襄が清に入ってから仕官しようとせず（清朝の科挙を受けず）、生涯を明朝の遺民としてあったことを意味しているであろう。

第二首目以下についても、杜甫の第二首は、寒い中、食べ物を探しに出るが、雪のために何も探せず、「男呻女吟四壁静（男呻　女吟　四壁静かなり）」とあって、家族の様が描かれる。冒襄の方は、「有祖与母俱七十（祖と母と有り倶に七十）」ではじまり、親や祖父母への孝養を尽くしていることを詠ずる。冒襄の母、馬恭人が七十になったのは、順治十六年（一六五九）のことである（『冒巣民先生年譜』）から、少なくともこれ以後の作であることがわかる。杜甫の第三首は、「有弟有弟在遠方（弟有り　弟有り　遠方に在り）」ではじまり、弟に会いたいことを詠ずるが、冒襄のそれは「無伯無叔鮮昆季（伯無く　叔無く　昆季鮮（すくな）し）」と、やはり親戚兄弟の話題といった具合に、つかず離れず、冒襄の作は、杜甫の原作に沿っている。

ついで『巣民詩集』巻二の「百憂集行　寄呈芝麓先生」を見たい。冒襄が単独で作った作とはいっても、この詩は、芝麓先生すなわち龔鼎孳に贈った詩である。「百憂集行」は杜甫の作品で、かつてむじゃきに元気に遊び戯れていた自分が、いまや家族を養わなければならない生活の現実の前に押しつぶされそうであるさまを詠じた詩であり、冒襄の作も、それと似た状況を詠じている。長い詩であるので、少しずつ区切って読んでいくことにする。

我聞謝公言　　我は謝公の言を聞き
双涕綆縻下　　双涕　綆縻（こうび）のごとく下る
中年已後哀楽多　　中年已（い）後　哀楽多し
正頼絲竹一陶写　　正に絲竹に頼りて一に陶写す

『世説新語』言語篇に、謝安が王羲之に「中年になって哀楽の情にもろくなった」というと、王羲之が「年をとると、自然そうなるものだが、糸竹（音楽）によって気晴らしをするしかない」と答えたとある。その謝安の言葉を聞けば、二すじの涙が、ひものように流れる。この王羲之の言葉の後には、「糸竹（音楽）によって気晴らしをするしかないが、子供たちに気づかれ、楽しみをそこなわれるのではと心配だ」の句が続く。

又聞魏信陵　　又た聞く魏の信陵
乃是貴公子　　乃ち是れ貴公子
暮年遭讒不自聊　　暮年　讒に遭ひ　自ら聊（いやし）くもせず
乃借醇酒自汚耳　　乃ち醇酒を借りて自ら汚す耳（のみ）

また『史記』魏公子列伝に見える信陵君は貴公子でありながら、晩年、讒言をこうむって思うようにならず、そこで酒におぼれて、自らを汚すことになった。

嗟余数載喚奈何　　嗟（ああ）　余　数載　喚ぶこと奈何
猝来蜂蠆何其多　　猝（にわ）かに来たる蜂蠆（ほうはく）　何ぞ其れ多き
無頼乃思託山水　　頼り無ければ乃ち山水に託さんことを思ふも

有恨猶且躭声歌　　恨み有り　猶ほ且つ声歌に耽る

ああ、わたしは何年叫び続けたことか。突然やってくる蜂やぶよが何と多いことか。頼りになるものもないので、山水のうちに身を隠したいと思うのだが、しばらく声歌に耽溺するしかないのが恨めしい。

八旬白髪高堂母　　八旬の白髪高堂の母
幼弟双双繞衣走　　幼弟　双双として　衣を繞(めぐ)りて走る
茹荼飲蘗如含飴　　荼を茹(くら)ひ蘗(げつ)を飲むこと飴を含むが如し
飲刃呑灰称逸叟　　刃を飲み灰を呑み逸叟と称す

家には八十になる白髪の母が高堂におられ、幼いものたちが組になって自分のまわりを走り回っている。苦菜を食べ苦い黄檗を飲むこと飴を含むがよう、刃を飲み灰を呑みながらも逸叟（隠逸老人）と称している。冒襄の母馬恭人は、冒広生の『冒巣民先生年譜』康熙十五年の条に万暦庚寅（十八年、一五九〇）の生まれとなっているから、八十歳になったのは康熙八年（一六六九）のことである。この詩が作られたのは、おおむねこのころのことと思われる。ただ、幼弟についてはよくわからない。冒襄の弟である冒褒が生まれたのは順治元年（一六四四）のことで、この時にはすでに成人であった。冒襄の孫の泓が順治十七年（一六六〇）に生まれ、孫の渾が康熙元年（一六六二）に生まれているから、彼らのことをいっているのだろうか。

因思汗漫物外遊　因りて思ふ　汗漫物外の遊
倒行逆施真良媒　倒行　逆施　真に良媒

そこで、この世の外に遊びたいと思うのだ。人の道をはずれたひどい目にあうのも、この世の外に遊ぶためのよいきっかけになる。

『淮南子』巻十二に「吾与汗漫期於九垓之外（吾与に汗漫して九垓の外に期す）」とあり、杜甫の「奉送王信州崟北帰（王信州崟の北帰を奉送す）」詩（『杜詩詳注』巻十九）にも「復見陶唐理、甘為汗漫遊（復た陶唐の理を見ば、甘んじて汗漫の遊を為さん）」とある。「倒行逆施」は、『史記』伍子胥列伝に見える。楚を伐って父と兄の仇を討った伍子胥は、楚王の屍を掘り出してむち打った。友人の申包胥が、それはあまりにむごいというと、「日は暮れて道遠い。だから、人の道をはずれたこともするのだ（倒行逆施）」といった。

人言我欲為豪耳　人は言ふ　我豪為(た)らんと欲するのみと
焉能知我中心愁　焉(いずく)んぞ能く我が中心の愁ひを知らん

わたしのことを豪傑たろうとしているという人もあるが、どうしてわたしの心中の愁いに気づいてくれないのだろうか。

只今悪浪如山簸　　只だ今　悪浪　山の如く簸(ゆ)れ
猶向黄牛容易過　　猶ほ黄牛に向ひて容易に過ぐ

いまやひどい波が山のようにおしよせ、三峡の難所である黄牛山、黄牛灘に向かってあっという間に通り過ぎてゆく。世の荒波にもまれていることをいおう。

歌僮雑遣作馬牛　　歌僮　雑遣せられて馬牛と作る
園石憑風更搥破　　園石　風に憑るも更に搥破せんや

歌僮たちは、やたらに派遣され、牛馬のようにこき使われている。この「園石」は、あるいは「圓石」かもしれない。とすれば、張華『博物志』巻八に見える、張顥が梁州の長官であった時、鳥が飛んできて突然町なかに落ちてきた、みなが取ると、丸い石に変わった。張顥がたたき割らせて見ると、「忠孝侯印」とある金印が出てきた。張顥は後に大尉になった、との話にもとづくかもしれない。丸い石が風に乗って送られてきたとしても、それをたたき割ることができようか、つまり、仕官するつもりはないことをいうか。

情深不覚為公言　　情深くして覚へず公の為に言ふ

公若聞之増煩冤　公　若し之を聞かば煩冤を増さん
柳瓢巾拂吾生事　柳瓢　巾拂　吾が生の事
終擬趺跏祇樹園　終には祇樹園に趺跏せんことを擬す

胸のうちの思いがあふれ、思わず申し上げました。あなたがお聞きになったらわずらいを増すことになりましょう。柳の瓢箪（仙人の持ち物）や踊り（巾拂は舞踊の道具）がわたしの人生。とはいうものの、最後には祇樹園で結跏趺坐しようと思っているのです。祇樹園は、祇樹給孤独園。須達長者が釈迦に寄進した寺。最後には仏の道に帰依したいというのである。

この詩は『巣民詩集』巻二に収められる。『巣民詩集』の各巻は詩体別であるが、各巻の中は編年になっていると思われ、この詩の前に「戊申三月三日呉門遊山行八首」（戊申は康熙七年、一六六八）が置かれ、その後の「二哀詩」には「康熙十三年（一六七四）」とあるが、龔鼎孳は康熙十二年（一六七三）には亡くなっているので、康熙七年から十二年の間に作られた詩、さらに「八旬の白髪高堂の母」から、冒襄の母馬恭人が八十歳になったのが、康熙八年（一六六九）であるから、だいたいこの前後の作と思われる。この康熙八年の五月に、龔鼎孳は北京にあって兵部尚書から礼部尚書に移っている。

董遷『龔芝麓年譜』によれば、康熙七年（一六六八）の五月に「冒青若（丹書）南旋」とあって、冒襄の三男である冒丹書が北京から帰郷していることがわかる。また冒襄『同人集』巻七に龔鼎孳の「穀梁二哥移寓螺浮先生新園酒中偶成十二絶即請同作衝口而出不復詮次辟老見之当笑老顛潦倒也庚戌長至月晦日（穀梁二哥寓を螺浮先生の新園に移

す。酒中偶たま十二絶成る。即ち同作を請ふ。口を衝いて出づるものにして、復た詮次せず。辟老之を見て当に老顛が潦倒を笑ふべきなり。庚戌の長至月晦日）」を収めている。庚戌、すなわち康熙九年（一六七〇）の夏に冒襄の次男である冒禾書（穀梁）は北京にあって、龔鼎孳は、そこで作った詩を冒襄に送っている。

龔鼎孳が冒襄の詩集に寄せた「水絵庵二集題詞」（『同人集』巻三）には、冒襄の二人の息子が、わたしの門に遊学すること十余年とある。『冒巣民先生年譜』康熙十年の条には、冒禾書が、翰林院で書法の試験に応じたと記されている。冒襄は、二人の息子をいわば就職活動のために北京に送り出しており、時に大官であった龔鼎孳のもとに行かせていたと思しい。

この間、息子たちとの通信に寄せて、冒襄と龔鼎孳とは詩のやりとりをしている。この「百憂集行」の詩も、おそらく息子たちが北京にあった時に龔鼎孳に贈ったものと思われる。杜甫の「百憂集行」に、

強将笑語供主人　悲見生涯百憂集
入門依旧四壁空　老妻覩我顔色同
痴児不知父子礼　叫怒索飯啼門東

強ひて笑語を将て主人に供す
悲しみ見る生涯百憂の集まるを
門に入れば旧に依りて四壁空し
老妻我を覩る顔色同じ
痴児は知らず父子の礼
叫怒　飯を索めて門東に啼く

身を寄せて世話になっている主人には、無理をして笑顔で応対するが、わが生涯には多くの心配事が集まっているのを悲しく思う。門を入れば、相変わらず何もなくがらんとしており、老妻は相変わらずさえない顔つきでわたしを見る。できの悪い子供は父子の礼をも知らず、ご飯をほしがって大声で叫んでは門の東でないている。杜甫の詩もできの悪い息子に苦労させられているとの内容である。

冒襄の「百憂集行」も、さまざまな苦労があってたいへんだとの詩であるが、ここで冒襄は、息子たちのことが心配だから、よろしくお願いしたいと龔鼎孳に伝えたかったのではないだろうか。苦労しているといいつつ、さりげなく息子への誘掖を期待する内容の詩に、杜甫の詩をうまく使っているわけである。(7)

(2) 友人たちと唱和して作った詩

ついで、みんなで詩を作った時に、杜詩を用いた場合がある。

まずは『同人集』巻五に収める龔鼎孳の「庚寅春杪辟疆同于皇孝威園次枉集寓園用少陵遊何将軍山林韻八首（庚寅の春杪　辟疆　于皇、孝威、園次と同に枉げて寓園に集ふ。少陵が遊何将軍山林の韻を用ふ。八首）」、それに対する冒襄の和詩がある。龔鼎孳の詩の方は、『定山堂詩集』巻八に「邗江春暮于皇孝威園次辟疆過集用少陵陪鄭広文遊何将軍山林十首之八韻（邗江春暮　于皇、孝威、園次、辟疆過（よぎ）り集ふ。少陵が鄭広文に陪して何将軍の山林に遊ぶ十首の八韻を用ふ）」として収められており、冒襄の和詩の方は、『樸巣詩選』に「晩春社集芙蓉寓館同友人用少陵陪鄭広文遊何将軍山林十首之八韻（晩春　芙蓉寓館に社集す。友人と同に少陵が鄭広文に陪して何将軍の山林に遊ぶ十首の

八韻を用ふ)」としても収められている。于皇は杜濬、孝威は鄧漢儀、園次は呉綺である。

これは順治七年（一六五〇）、龔鼎孳が父親の喪が明けたもののいまだ復職せず、江南の各地を遊歴し、揚州にあった時の詩である。まずは龔鼎孳が、杜甫の「陪鄭広文遊何将軍山林」詩（『杜詩詳注』巻二）に唱和した詩を作ったので、冒襄はそれに唱和した。みなで遊んだ作であるから、杜甫のこの詩に唱和するのは、状況としても合致している。龔鼎孳の詩の第一首は杜甫の第一首、第二首は杜甫の第二首、第三首は杜甫の第三首、第四首は杜甫の第五首、第五首は杜甫の第六首、第六首は杜甫の第七首、第七首は杜甫の第九首、第八首は杜甫の第十首である。冒襄の作も同じである。

杜甫の詩は、何将軍の別荘に遊んで、満足しているさまを詠じた詩であるが、龔鼎孳のそれには、まず第七首に、

戦場多白馬　戦場　白馬多く
荒圃独閑雲　荒圃　独り閑雲

といった聯があるし、第八首には、

垂柳時堪折　垂柳　時に折るに堪へ
青山事尚多　青山　事尚ほ多し

といった聯がある。戦場は、明末清初の戦乱を思い起こさせるものであろうし、「青山　事尚ほ多し」は、明の進士でありながら、李自成にも仕え、さらに清にも仕えている龔鼎孳自身の閲歴も背景にあるであろう。

それに唱和した冒襄の方は、例えば第一首、

客愁忙裏断　客愁　忙裏に断たれ
棄月渡渓橋　月に棄(じよう)じて渓橋を渡る
秘閣生春画　秘閣　春画生じ
高吟落漢霄　高吟　漢霄落つ
一枝猶未隠　一枝　猶ほ未だ隠れざるも
三径屢相招　三径　屢(しばしば)　相招く
共臥桃花畔　共に臥す　桃花の畔
方知俗境遙　方(はじ)めて知る俗境遙(はる)かなるを

月夜の晩に橋を渡って龔鼎孳のもとをたずねてゆくと、慌ただしさのうちから、旅先にあることの愁いが忘れ去られる。人知れず奥まった高殿は、春の絵のようであり、詩を吟ずれば、天の川が天から降ってくるようである。一本の枝に隠棲することはまだしていないが、三本の小径（隠者の住まい）がしばしばわたしを招くようである。桃花の水辺でともに横になったことで、ようやく俗世界を遙かに離れたことがわかるのである。

「一枝」は、『荘子』逍遙遊に「鷦鷯巣於深林、不過一枝（鷦鷯深林に巣くふも、一枝に過ぎず）」とあり、杜甫の「宿府」詩（『杜詩詳注』巻十四）にも「已忍伶俜十年事、強移棲息一枝安（已に忍ぶ伶俜十年の事、強ひて移りて棲息す一枝の安きに）」とある。「三径」は、隠者の住まい。陶淵明「帰去来辞」に「三径就荒、松竹猶存（三径荒に就き、松竹猶ほ存す）」とある。こちらの詩は、むしろのんびりした内容で、杜甫のそれに近いといえようか。

ただ、杜甫の「陪鄭広文遊何将軍山林」詩では、例えば第一首の、

名園依緑水　　名園は緑水に依り
野竹上青霄　　野竹は青霄に上る

のようないきいきした場面の描写が見られるのに対して、冒襄の作では、この詩の頷聯「秘閣　春画生じ、高吟　漢霄落つ」が、かろうじて宴会の行われる場面を描いているものの、杜甫の描写の細やかさに比べるといささか遜色ありとしなければならない。冒襄の詩は、どちらかといえば外物の描写より、内心の吐露、あるいは議論に傾いているといえるであろう。

『同人集』巻十一に収める康熙二十七年（一六八八）の重陽節の折に、冒襄の屋敷の得全堂で宴会をし、参加したみなで作った詩がある。佘儀曾の「巣民先生得全堂流連菊飲韻用工部遣興五首（巣民先生の得全堂に流連し菊飲す。韻は工部の遣興を用ふ。五首）」、そして冒襄の「佘羽尊以菊飲五言古詩五首見貽用少陵漫興韻亦復歩和（佘羽尊　菊

飲の五言古詩五首を以て貽らる。少陵が漫興の韻を用ふ。亦た復た歩和す）」である。それぞれ五首あるが、その第一首は杜甫の「遣興五首」（『杜詩詳注』巻七）の第一首「蟄龍三冬臥」、第二首は同じく第二首「昔者龐徳公」、第三首は「遣興三首」（『杜詩詳注』巻六）の第一首「我今日夜憂」、第四首は同じく第二首「蓬生非無根」、第五首は同じく「昔在洛陽時」である。冒襄のは、佘儀曾の詩に和したものである。

また、同じ時に、薛聞「秋杪集巣民老伯還樸斎看菊歩工部九日二首（秋杪　巣民老伯の還樸斎に集ひ菊を看る。工部が九日二首に歩す）」、冒襄の「薛墨庵後至賦菊譙詩用少陵九日韻同和二首（薛墨庵後に至り菊譙を賦す。詩は少陵が九日の韻を用ひ同和す。二首）」（ともに『同人集』巻十一）があり、こちら前者では、第一首は杜甫の「九日五首」（『杜詩詳注』巻二十）の第一首「重陽独酌杯中酒」、第二首は杜甫の「登高」（『杜詩詳注』巻二十）である。後者は、前者に和したものであるが、順序が逆になっている。(8)

たしかに重陽といえば杜甫の詩がよく知られるが、いずれも杜甫の重陽の詩を踏まえての作である。重陽の折には、冒襄も、登高をし、詩を作り、そして芝居を見ている記録が多くある。(9)

ここでは、薛開の詩に冒襄が次韻した一首を見てみよう。

老去傷秋賦七哀　老い去りて秋を傷(いた)み　七哀を賦す
素心人与菊徘徊　素心の人　菊と徘徊す
追歓酒倍平原興　歓を追ふ酒は平原の興に倍し
擬古詩従陶杜来　古に擬ふる詩は陶杜従(よ)り来(きた)る

夢繞黄花堪作枕　夢は黄花を繞(めぐ)り　枕と作すに堪へ
木余酸棗愧非台　木は酸棗を余すも　台に非(あら)ざるを愧づ
明年莫管誰衰健　明年　管する莫れ　誰か衰健なるかを
且罄尊前現在杯　且く罄(つ)くせ　尊前現在の杯

「哀、徊、来、台、杯」で押韻しており、これは杜甫の重陽の詩の絶唱ともいえる、夔州での作、「登高」に次韻したものである。

年を取って秋を悲しみ、七哀の詩を作る。「七哀」は、曹植など多くの詩人が作っているが、ここではおそらく張載のそれを意識しているであろう。張載の「七哀詩」は、秋を悲しみ、みずからの老いを悲しむ詩である。

冒頭の一句は、杜甫の「九日藍田崔氏莊」（『杜詩詳注』巻六）の「老去悲秋強自寛（老い去りて悲秋に強ひて自ら寛うす）」を用いたものであるし、冒襄の詩の尾聯も、杜甫のこの詩の「明年此会知誰健、醉把茱萸仔細看（明年此の会　知んぬ誰か健なる、酔うて茱萸を把りて仔細に看る）」を用いている。

純粋な心を持った人が菊のあるところ、どこでも歩き回っている。「素心人」は、陶淵明の「移居」詩に、「聞多素心人、楽与数晨夕（素心の人多しと聞き、与に数しば晨夕せんと楽(ねが)ふ）」とある。

楽しみを追う酒は、平原君の興趣に倍するほどであり、いにしえになぞらえる詩は、陶淵明、杜甫からやってくる。平原君の酒の興については、『孔叢子』巻四に、平原君が子高に酒を飲ませた際、堯舜は千鍾、孔子は百觚の酒を飲んだ。聖賢はみな飲めます、といった話がある。ここで酒を飲むのは、平原君が飲んだ酒以上の楽しみである。

菊の花の枕で眠ることで、黄色い菊のよい夢を見ることができる。菊枕は、菊の花びらを入れた枕。頭をすっきりさせ、邪気を払うとされる。木には酸棗（すっぱいナツメ）が残るが、酸棗（地名）にあった韓王の台でないことをはじる。酸棗には韓王の望気台があり、晋の孫楚が「韓王台賦」を作っている。この聯については、杜甫が四川での重陽に作って厳武に送った「九日奉寄厳大夫」（『杜詩詳注』巻十一）に厳武が答えた詩「巴嶺答杜二見憶（巴嶺にて杜二が憶はるるに答ふ）」（『杜詩詳注』巻十一）の「臥向巴山落月時、両郷千里夢相思（臥して向ふ巴山落月の時、両郷　千里　夢に相思ふ）」や「江頭赤葉楓愁客、籬外黄花菊對誰（江頭赤葉の楓　客を愁へしむ、籬外黄花の菊誰にか對す）」などが思い出される。

来年、誰が衰え誰が元気であるかなどというのはよそう。いまは酒樽にある目の前の酒を飲み干そうではないか。

重陽の詩といえば、やはり杜甫であるが、ここでは明らかに杜甫を踏まえて詩を作っている。

冒襄にはまた友人たちとともに絵を鑑賞しながら唱和詩を作っている場合もあった。そこでも杜甫の詩が踏まえられている。『同人集』巻五に、王畿の「辟疆先生偕無忝批閲趙松雪高士苦吟図即席同限杜工部奉先劉少府新画山水障歌韻（辟疆先生　無忝と偕に趙松雪が高士苦吟図を批閲す。即席同に杜工部が奉先劉少府の新画山水障歌の韻に限る）」、そしてそれに対する戴移孝の和詩があって、趙孟頫の絵を見た時に、やはり杜甫の「奉先劉少府新画山水障歌」（『杜詩詳注』巻四）の韻を用いて、詩を作っている。『同人集』には収めないが、冒襄の『巣民詩選』巻二には、冒襄の和詩「与無忝式九披閲趙松雪高士苦吟図即席同限杜工部奉先劉少府新画山水障歌韻（無忝、式九と与に趙松雪高士苦吟図を披閲す。即席同に杜工部が奉先劉少府の新画山水障歌の韻に限る）」もある。

この絵については、『同人集』巻三に、陳継儒の「跋趙松雪高士苦吟図」があり、古木のもとで高士たちが、琴を弾いたり阮咸をつまびいたりする図であるとする。その描き方は、陸探微、顧愷之に迫るものであり、俗眼は李龍眠、銭選（舜挙）のようだというかもしれないが、それを聞いたら趙孟頫は、口をおおって笑うだろうといっている。それを承けてか、戴移孝の和詩には「龍眠舜挙莫能比（龍民舜挙　能く比ぶる莫し）」の句がある。

この詩が作られた時には、冒襄のもとに、王畿や戴移孝がいたようで、『同人集』巻五のこの詩のとなりには、戴移孝の「野桑為大風所折離披復生舟行同冒年伯感賦限少陵柟樹為風雨所抜歎韻（野桑　大風の折る所と為り、離披たるも復た生く。舟行し冒年伯と同に感賦す。少陵が柟樹風雨の抜く所と為るの歎の韻に限る）」、そしてそれに対する王畿の和詩があり、また冒襄の『巣民詩選』の上述の詩のとなりには、冒襄自身の「野桑為大風所折離披復生舟行同無忝感賦限少陵柟樹為風雨所抜歎韻（野桑　大風の折る所と為り、離披たるも復た生く。舟行し無忝と同に感賦す。少陵が柟樹風雨の抜く所と為るの歎の韻に限る）」がある。杜甫の詩は、成都の草堂の前にあった二百年にもなろうとする柟樹が、風によって倒れてしまったことを歎く詩である（『杜詩詳注』巻十）。こちらは、冒襄、王畿、戴移孝の三人が船に乗っていた時、風向きが悪く、船が進まなくなった。見ると、昨年の台風によって、野桑の木が倒されていた。しかし、再び春になって、倒れた木から枝葉が出ていることに感動した詩である。この時には、ことあるごとに杜甫の詩に唱和していたことがわかる。

なお、絵画にまつわる詩については、『同人集』巻十「乙丑倡和」に、冒襄の「乙丑端陽玉山閨人以湘筆摹画薛少保十一鶴貺節為書少陵五言古詩於上仍依韻題和一首（乙丑端陽　玉山閨人湘筆を以て薛少保が十一鶴を摹画し貺節す。為に少陵が五言古詩を上に書す。仍ほ韻題に依りて和す。一首）」、それに対する汪耀麟、汪懋麟、顧道含の「巣

翁先生以玉山夫人十一鶴属題即用杜起句並韻（巣翁先生　玉山夫人が十一鶴を以て題を属す。即ち杜が起句並びに韻を用ふ）」がある。ここで、玉山夫人が描いた鶴に題した詩は、杜甫の「通泉県署屋壁後薛少保画鶴」（『杜詩詳注』巻十一）である。「薛公十一鶴」ではじまる詩で、汪耀麟の詩は、この句を冒頭に置いている。玉山夫人は、冒襄の側室の一人である金玥のことであろう。[10] 乙丑は、康熙二十四年（一六八五）である。ここでは、金玥が描いた鶴の絵に、冒襄が、杜甫の詩を題したわけである。冒襄の詩自体が杜甫の詩に次韻したものであるから、友人たちの詩も同じ韻字を用いている。冒襄はこの年七十五歳、その昔、陳継儒から、冒襄は、科挙の勉強をするよりも、仙人になる素質があるといわれていた。そのことをいま思い出したとあり、

出入懐袖中　　出入す　懐袖の中
展玩何其頻　　展玩　何ぞ其れ頻りなる
老我愧垂翅　　老我　翅を垂るるを愧ぢ
渇想芝田津　　渇想す　芝田の津
倘遇葫蘆客　　倘（も）し葫蘆客に遇はば
凌霄誰能馴　　凌霄　誰か能く馴れん

この鶴の絵を懐から出しては、しきりにひらいて見て楽しんでいる。年老いた自分でも、羽根を下に垂れることを恥ずかしく思い、仙界への渡し場をしきりに思う。もし葫蘆客に出会ったら、傷もなおって、雲を越えて飛んで行

き、誰になれ従ったりするものか。

唐の銭起の「送員外侍御入朝」詩に「自憐江上鶴、垂翅羨飛鳴（自ら憐れむ　江上の鶴、翅を垂れて飛鳴を羨むを）」とある。芝田は、仙人が霊芝を植えた場所。末尾は、『酉陽雑俎』巻二に見える胡蘆生のこと。その血を塗ることによって鶴の傷を癒やした。杜甫の「通泉県署屋壁後薛少保画鶴」詩に、「冥冥任所往、脱略誰能馴（冥冥として往く所に任せ、脱略　誰か能く馴れん）」とある。絵を見て詩を作る場合にも杜甫の詩に唱和していたことがわかる。

また、『同人集』巻六には、戴本孝の「己亥元夕後二日至雉皐訪巣民年伯即事三十韻兼示穀梁青若（己亥元夕後二日　雉皐に至り巣民年伯を訪ぬ即事三十韻。兼ねて穀梁青若に示す）」の詩があり、それに陳維崧が和した詩が「和務旃即事三十韻用杜陵体奉別巣民先生兼示務旃（務旃が即事三十韻に和す。杜陵体を用ふ。巣民先生に奉別し兼ねて務旃に示す）」がある。己亥は、順治十六年（一六五九）。陳維崧が「用杜陵体」といっているのは、おそらくは「送韋十六評事充同谷防禦判官」（『杜詩詳注』巻五）に和したものであることをいう。この詩に関する冒襄の唱和詩は見ることができないが、冒襄の周辺にあった人びとが詩を作る時にも、杜甫の詩の唱和詩を作っていたことがわかる。冒襄の好みをみなも知っていたのであろう。

最後に、冒襄といえば、書画の世界でも名を知られていた。詩ではないが、冒襄が書いた杜甫の詩に対して、友人たちが跋文を書いたものが残っている。『同人集』巻三に、陳維崧、方孝標、方亨咸、王士祿の「跋巣民手書少陵発秦州紀行古詩冊」があって、冒襄が杜甫の「発秦州」（『杜詩詳注』巻八）を書いたものが書冊になっていたことが知られる。この陳維崧の文章には、

巣民先生は杜甫を読むことにのめりこんでおられ、毎年ひとわたり評注を加えられる。気に入ったところがあると、さらによろこんで書き写される。ここに記録された紀行詩二十五首は、どの文字も美しく、先生の書も縦横無尽であって、詩章とたがいに照り映え、まことに双絶である。[11]

とある。また方亨咸の文章では、

亡くなった父は少陵（杜甫）に五十年ものめりこんでおられ、批注も数十冊に及び、それぞれみなことなっていた。父は巣民兄と詩を論じ分析するたびに、意気投合していた。巣民兄が少陵から得たものが深いことが知られるであろう。[12]

方亨咸にとって亡くなった父とは、方拱乾である。[13] 方拱乾は、冒襄の父の冒起宗と科挙の同年であり、冒襄とも深いつながりがあったことは、この後に触れたい。冒襄の周辺には、杜詩ファンが多かったこともたしかのようである。方孝標は、

辟疆先生が山水の変わってすばらしいところを経めぐるたびに、その思いを詩歌に託したさまは、あたかも謝霊運、鮑照のようであるが、その思いは、杜少陵のこの二十五首の詩にもとづくと思われる。[14]

といっている。杜甫の「発秦州」詩とは、「発秦州」に続く「赤谷」「鉄堂峡」をはじめとする十二首のことで、杜甫が秦州を出て同谷県に至るまでの様子を描いた連作であろう。ここで二十五首といっているのは、よくわからない。実物を見られないので、想像に過ぎないのだが、あるいは杜甫の詩集で、このあと同谷から成都へ向かう様子を詠じた詩もあり、それらを含めているのかもしれない。秦州から同谷にあったころが、先の「感懐七歌　倣杜少陵体」で見たように、杜甫がもっとも苦労していた時代であって、冒襄もそれを自分に重ねていたのであろう。

三、冒襄の散文に見える杜甫

前の章では、冒襄とその周辺の文人の詩作の中に見える杜甫について見てきたが、本章では、冒襄の散文の中に見える杜甫について見てみることにしたい。

冒襄が、その父の科挙同年である方拱乾を悼んで書いた「祭方坦庵年伯文」（『樸巣文集』巻七）には次のようにある。清のはじめ、清軍が南下してきた際、冒襄は、浙江の海塩に難を避けた。

乙酉の年（順治二年、一六四五）、亡き父上が長江の上流地域で漕運の監督官になり、わたし（冒襄）は台州の檄を捧ずることを辞し（冒襄は台州の司李官を授けられたが赴任せず）、母を奉じて塩官（海塩）に難を避けた。そのとき、年伯（方拱乾）と伯母はともに北京で賊難にあって以来、辛苦を重ねて走り回っておられたが、

諸兄たちを引き連れてやはり塩官にやって来られた。ほどなく大兵（清軍）が南下し、いくさがうち続いて、政府は再び崩壊した。両家はすぐ近くにありながら、たがいに顧みることもなく、荒れた村、広漠たる野をあちらこちら逃げ回って、杜老（杜甫）の「彭衙行」に描かれたような悲惨さをすっかり経験させられ、ついにはそれぞれ殺戮にあうことになってしまった。幸いに身内の者は無事であった。髪はぼさぼさ、はきものもはかずに再び城内に入った時には、伯母がみずからわたしのために髪を剪ってくださった。[15]

ここでも、明清の王朝交替時期の悲惨なありさまを、杜老（杜甫）の「彭衙行」に描かれたような悲惨さといって表現している。杜甫の「彭衙行」（『杜詩詳注』巻五）は、安禄山の乱が起こり、杜甫が家族を疎開させるために、家族を引き連れ鄜州に向かう途中、彭衙のまちを通った時のことを回想して作った、

憶昔避賊初　　憶ふ昔　賊を避けし初め
北走経険艱　　北に走りて険艱を経たり

ではじまる五言の古詩である。子供たちを引き連れて旅をする苦労、そしてまた、旅をする途中、彭衙のまちで、知り合いの孫宰という人から、手厚いもてなしを受けたことを詠ずる。悲惨な状況もさることながら、『影梅庵憶語』によれば、

秦渓で難にあった後、家族八人だけはかろうじて助かった。だがこの時、下男下女で殺されたものは、ほとんど二十人になろうとしていた。ふだん集めた骨董品や衣服などもすべて失ってしまった。乱が少し落ち着いて、こっそり城内に入って友人たちに救いを求めた時には、ふとんの準備すらもできなかった。夜は方坦庵年伯（拱乾）のところに庇護を求めたが、方も跡をくらましていて戻ったばかりであり、わずかに毛布一枚しかなかったので、三兄といっしょにわきの小部屋に泊まった。時に秋の終りで、窓の四方から風が吹き込んできた。[16]

とあって、逃げまどう冒襄が、方拱乾に庇護を求め、助けてもらったこともまた、ここで「彭衙行」が思い起こされる理由になっていると思われる。

冒襄の文集『巣民文集』巻一には、「杜少陵夔州詩選序」が収められている。これは、冒襄自身が編んだ杜甫の詩集で、もっぱら杜甫の夔州時代の作品を集めたもののようである。夔州時代は、杜甫にとって苦労の多かった時代ではあるが、そこで約四三〇首もの詩を作っており、文学的には多産な時代であった。冒襄の「杜少陵夔州詩選序」には、

わたしが子供だったころ、亡き祖父が蜀の官となり、わたしは父につきしたがって、蚕叢や雲桟など、五人の天兵が作ったとされる蜀の名勝を、この目で十分見たばかりでなく、心でも十分堪能したのである。帰って年月がたったが、時に杜甫の夔州時代の詩を読むと、旧遊の続きのような気がして、まるで目の前にあるかのように思われる。[17]

とある。『巣民先生年譜』の天啓元年（一六二一）の条には、「復た祖父に随ひて酆都に之く」とある。江南から四川の酆都に向かうには、長江をさかのぼったであろうから、かならずや夔州を通ったはずである。

「杜少陵夔州詩選序」では、唐の時代にあって、杜甫がこの蜀の地に来たことは千古の奇事であるという。科挙に合格できず、小官になってから、皇帝に諫言をして命の危険にまでさらされ、その後、食べるものもなく苦労をしていた。そのような杜甫が夔州に来て、「人が奇、境遇が奇であって、文が奇なのである」といって、杜甫の夔州詩を高く評価している。

四川が冒襄にとって、特別な思い出のある地であり、冒襄がとりわけ夔州時代の杜甫に思い入れを抱いていたことがわかる。夔州時代の杜甫の詩については、簡錦松『杜甫夔州詩之現地研究』（学生書局　二〇〇〇）、蔣先偉『杜甫夔州詩論稿』（巴蜀書社　二〇〇二）、封野『杜甫夔州詩疏論』（東南大学出版社　二〇〇七）、古川末喜『杜甫農業詩研究』（知泉書館　二〇〇八）など、杜甫の詩でも特に夔州時代の詩についての研究もある。この冒襄の編んだ夔州詩を現在見ることができないのは残念であるが、冒襄は、早くから杜甫の夔州詩に着目していたことになる。

また、『巣民文集』巻二には、「王自牧集杜詩序」がある。甲辰とあり、康熙三年（一六六四）の文章である。そこに「杜癖」という言葉が見える。これは杜甫の詩からの集句詩を作った王自牧（王余高）の集への序文であり、それを高く評価しているのだが、その中に、

わが家は代々詩を業としており、祖父は林泉に世を避け、ただ吟詠に没頭して、集陶、集杜の詩を作っていた。わたしはさらにわをかけた杜癖であり、子供のころから髪の毛が白くなるまで、手に持ち目で読み上げ、す

でに数十回になる。[18]

といっている。一般に「杜癖」とは、杜預の左伝癖をいうのであるが、ここでは前後の文脈からも明らかなように、杜甫を指している。冒襄自身はっきり杜甫好きを明言している資料である。

結び

以上、冒襄と杜甫の関わりについて、その資料を見てきた。たしかに冒襄自身の作品を通観した上では、杜甫の影は、他の詩人を圧して有力であるが、では、同時代の他の文人たちについては、果たしてどうなのか。それはさらなる課題である。

冒襄と関係の深かった銭謙益には『銭注杜詩』があるし、同時代の金聖歎にも『杜詩解』がある。周采泉の『杜詩叙録』（上海古籍出版社　一九八六）によれば、明末清初期に編まれた杜甫詩集はかなりの数にのぼる。そもそも明代における杜甫を考える場合、古文辞派（擬古派）の影響も考えなければなるまい。それらの問題については、すべて稿を改めて考えてみることにしたい。

1　冒襄の作品中では、陶淵明、李賀、蘇軾などへの言及を見ることができる。陶淵明については、『同人集』巻十一「菊飲倡和」に冒襄の「対菊飲酒五言古詩二十首張孺子首倡和陶飲酒韻余即次第歩之（対菊飲酒五言古詩二十首　張孺子が首倡　陶

の飲酒の韻に和す　余即ち次第に之に歩す）」を収め、「原倡」として張圯授（孺子）の作も収める。ただ、この時に作られた唱和詩は、この二首を除いて、ほかはみな杜甫の詩に唱和したものである。李賀については、『影梅庵憶語』に「李長吉（賀）の詩に「月漉漉、波煙玉」とあるが、彼女はこの「波」「煙」「玉」の三字を口ずさんではいつも、何度も何度もくりかえしていた。そして「月の精神、気韻、光景は、これに尽きています」というのであった。彼女が体ごと波煙玉世界に入ると、その眼差しは波のよう、その息は湘江にかすむもや（煙）のよう、そして身体は白玉のようで、人あたかも月のようなのであった。月もまた人のようで、二つで一つ、一つで二つなのである（李長吉詩云、月漉漉、波煙玉。姫毎誦此三字、則反覆廻環。曰、月之精神気韻光景、尽於斯矣。人以身入波煙玉世界之下、眼如横波、気如湘煙、体如白玉、人如月矣。月復似人、是一是二）」とあり、李賀の「月漉漉篇」を引いているほか、『同人集』巻五に杜濬「辟疆盟兄評点李長吉集歌」があることによって、冒襄には李賀詩に評点を施したものがあったことがわかる（伝わらないようである）。蘇軾については、『同人集』巻九に冒襄の「庚申人日用坡公庚辰歳人日韻（庚申人日　坡公が庚辰の歳人日の韻を用ふ）」、余瓆の「庚申歳朝用坡公韻奉和巣民先生原韻（庚申の歳朝　坡公の韻を用ひ巣民先生の原韻に奉和す）」、また冒襄の「花朝夜大雪和坡公韻（花朝の夜大雪　坡公の韻に和す）」を収める。

2　冒襄その人の活動と『影梅庵憶語』については、拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』（東京大学東洋文化研究所報告　汲古書院　二〇一〇）を参照。

3　然毎得一帙、必細加丹黄。他書中有渉此集者、皆録首簡、付姫収貯。至編年論人、準之唐書。姫終日佐余稽査抄写、細心商訂、永日終夜、相対忘言。閲詩無所不解、而又出慧解以解之。尤好熟読楚辞、少陵、義山、王建花蕊夫人王珪三家宮詞。等身之書、周迴座右、午夜衾枕間、猶擁数十家唐詩而臥。今秘閣塵封、余不忍啓。将来此志、誰克与終。付之一歎而已。

4　冒襄『同人集』巻三に収める杜濬の「題董宛君手書唐絶」によって、冒襄が選んだ唐詩絶句集を、董小宛が清書したものがあり、庚寅の年（順治七年、一六五〇）、杜濬はそれを見たことを記し、次のように述べている。

この詩は、辟疆（冒襄）がみごとに選録したものであるから、学者たちはきっと刊刻して世に伝えるにちがいない。だが、最初にこの目で小宛君が書いた本を見たのは、わたし一人である。だから、わたしが唐人に嫉妬しているのと同じように、後人はわたしに嫉妬することであろう（此詩辟疆甄摘既精、学士家定当繡梓伝世。然最初親見小宛君写本者惟余一人、則後人之妬余、又当如余之妬唐人耳）。

5　授以詩詞、輒能諷習。時於屏側作雛鶯声。尤愛読全部文選杜詩、常授以少陵北征古詩、僅三遍即覆巻成誦、琅琅不遺一字。

6　杜甫についてではないが、陳維崧「呉姫扣扣小伝」の、扣扣が亡くなる前の記述に、次のようにある。

思えば春のころ、彼女を連れて、水絵園の水のほとりで桃花を見たことがあった。彼女はわたしに詩を作ってくれといった。「あなたは平素からその言語は天下にすぐれています。どうして一小女子に一言を惜しむことがありましょう。」わたしはそこで四小詩を作って彼女に贈ったのであった。彼女は平生わたしに詩を作ってほしいなどといったことはなかった。そこには何かせっぱつまったようなものがあって、不思議だった。それからまた彼女は最近になって唐人の小絶句の句、例えば「玉顔及ばず寒鴉の色」などの句を抜き出して、画工に描かせたのであった。それはどれも閨房憔悴の語ばかりであって、なぜだかわからなかった（憶春間携姫看桃花於水絵堤前。姫向余索詩。君生平言語妙天下。何独於小女子惜一言耶。余乃作四小詩贈之。姫生平未嘗向余索詩。茲若有亟亟然者、可異也。又姫近日撮唐小絶句如玉顔不及寒鴉色之類、令画工図之。皆閨房憔悴語、不知何故）。

冒襄は、これが呉扣扣の若死の予兆だったのだ、と思うのである。「玉顔及ばず寒鴉の色」は、唐の王昌齢の「長信愁」の一句。「玉顔不及寒鴉色、猶帯昭陽日影来（玉顔は寒鴉の色に及ばざるも、猶ほ昭陽の日影を帯びて来たる）」。詳しくは、前掲拙著第二部第三章「陳維崧「呉姫扣扣小伝」」を参照のこと。

7　冒襄が単独で作った杜甫に倣った詩には、『巣民詩集』巻二に「天辺行歩杜少陵韻二首」がある。これは杜甫の「天辺行」（『杜詩詳注』巻十四）によるものである。ほかに『巣民詩集』巻三の「端午日痛先大夫用杜韻」がある。これは杜甫の「端午

日賜衣」（『杜詩詳注』巻六）の韻を踏んだものである。冒襄が父の冒起宗を亡くしたのは、順治十一年（一六五四）のことで、そのころの作である。

8　この時には、さらに

和石五中菊飲詩四律原韻　　冒襄

得全堂看菊呈巣民先生　石為松　五中

の詩も作られている（『同人集』巻十一）が、これは杜甫の詩に和したものではない。

9　拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』第一部第四章「冒襄の演劇活動」を参照。例えば、康熙二十七年（一六八八）の重陽の折の「九日扶病南城文昌閣登高同志狎至帰演秣陵春再和羽尊者歌原韻（九日病を扶けて南城の文昌閣に登高す。同志狎で至り帰りて秣陵春を演ず、再び羽尊者の歌の原韻に和す）」（『同人集』巻十一）がある。冒襄と演劇については、胡忌・劉致中『昆劇発展史』（中国戯劇出版社　一九八九）第四章第五節「家庭戯班、職業戯班和宮廷演劇続篇」にも見えることをここに補足する。

10　拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』第二部第四章「蔡夫人伝」参照。

11　辟疆先生沈酣読杜、歳輒評注一過。脱遇会心処、亦復欣然鈔撮。茲所録紀行詩二十五首、字字綺麗、而先生波磔縦横、復与詩章相映発、真双絶也。

12　先大夫沈酣於少陵五十年、批註凡数十本、本各不同、毎与巣民兄論析、輒相契合。顧知巣兄得於少陵者深也。

13　方拱乾と冒襄については、拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』第一部第二章「宣爐因縁」を参照。

14　辟疆先生歴山水奇佳処、輒託詩歌、彷彿謝鮑、其意蓋本杜少陵此二十五首詩也。

15　乙酉先大夫督漕上江、襄辞捧台州之檄、奉母避難塩官。時年伯与伯母、倶自北都被賊難、顛沛奔走、率諸兄亦来塩官。未幾、大兵南下、連天烽火、再見崩坼、両家咫尺不相顧、荒村漠野、竄逐東西、備歴杜老彭衙之惨、卒各罹殺掠。幸俯仰倶亡

恙。蓬跳再入城、伯母親為襄剪髪。

方氏の側でも、方孝標（玄成）『光啓堂文集』「冒母馬太恭人八十寿序」において、冒襄の母である馬氏のこの時の思い出を記している。

16　秦渓蒙難之後、僅以俯仰八口免。維時僕婢殺掠者幾二十口。生平所蓄玩物及衣貝靡孑遺矣。乱稍定、匍蔔入城、告急於諸友、即襆被不辦。夜仮蔭於方坦庵年伯。方亦竄跡初回、僅得一氈、与三兄共裹臥耳房。時当残秋、窗風四射。

17　余方総角時、先大父令蜀、余侍家君従宦、蚕叢雲桟、五丁天仗、不翅目飽、而心厭之矣。帰来積歳、間取夔州詩読之、似続旧遊、宛然在目。

18　吾家世業詩、先大夫放棄林泉、惟耽吟詠、亦有集陶集杜。余更有杜癖、自総角至白首、手披目誦、已竟数十過。

本研究は科研費（基盤研究(C)　二二二五二〇三四九）「明清の王朝交替と杜詩学」の助成を受けたものである。

Du Fu in the Literary Works of Mao Xiang

Yasushi OKI

Mao Xiang (1611–1693), a man of letters from the late Ming and early Qing periods, is famous for *Reminiscences of the Convent of Shadowy Plum-blossoms*, a memoir of his concubine Dong Xiao-wan. Reading his literary works, we find that he had quite an interest in the Tang Dynasty poet Du Fu (712-770) as, among other things, he comments on Du Fu, quotes from his poems and composes his own poems using the same rhyming style.

In this paper, I examine the literary works of Mao Xiang related to Du Fu's poems.

In his preface to an anthology of Du Fu's poems, Mao Xiang states his enthusiasm for Du Fu's work. Mao personally faced great hardship during the troubled times of the Manchu conquest. In fact, Du Fu himself lived a life fraught with worry, especially during the An Lu-shan Rebellion. The similarities he felt between their experiences led Mao not only to sympathize with Du Fu but also to compose poems using the same style.